

あとがき——これからの人間形成のために——

本書では、今日の教育が混迷している原因を明治維新にさかのぼって解明した。それらの事柄は今日から見れば歴史的な出来事である。そのような歴史的な出来事が今日の教育の問題に深くかかわっていることを読者にはご理解頂けたと思う。そして、これまで抱いていた「教育」についての様々な誤解に気付いていただけたと思う。

先ず、文部省は教育を実施する官庁ではなく学問を実施する官庁として設立されたこと、学校は教育を施すところではなく学問を行う所であったことである。そして、「教育」は「Education」の概念とは異なる、ということである。「Education」は「能力の開発」であり、「能力」としては必ず職業に関する要素を含んでいることである。

このような誤解が極めて日本的であり、その誤解は今日の教育をめぐる様々な問題を排出している根源となっている。そのため、本来のキョウイクであるべき職業能力開発を教育ではないとする観念が拡大し、わが国特有の普通教育論が確立されたといえる。

人間形成は、西園寺公望が「新教育勅語案」に記したように、正に「国家百年ノ大猷」と言える。明治の教育が後進国であったわが国を近代化してきた役割は大きい。このこと

を否定するものではない。しかし、これからの「先進国」としての国民のキョウイクがこれまでと同じ教育であって良いはずはない。「教育」が強調された一八八五（明治18）年の第三次の「教育令」からも一二〇年が過ぎた。今後のキョウイクをどのように築くのか、まさに「百年の大猷」を今確立しなければならないのではなからうか。特に、今後の世界を考えたとき、明治の富国強兵・殖産興業策の教育と同じでは一人ひとりのすべての国民が幸せになれるとは思えない。

ではどのような戦略と展望を示すべきなのであろうか。GDP第2位の座を中国に渡した今、東日本大震災の発生はその戦略を築く良いきっかけではなからうか。

さて、「学問」が唱導された明治初年から、「教育」が強化された明治18年までは今日からすれば極めて短い期間であり、その時期の変化を問題にすべき意味は小さい、という論も出よう。確かに社会は激動の時代であった。しかし、その激動の中で、国民は「立身出世」を次第に実感するようになり、「学問」から「教育」へ変化したことを当時の国民は認識できるように国から情報を与えられず、その立身出世は学校で教育を受けることであることだと考えるようになったのだと思われる。

その明治期の「教育」をめぐる重要な観点を出した人は本書で明らかにしたように福沢諭吉であり、彼の「発育」論であったが、時の政府からは無視された。その「発育」の意

味については戦後の教育界でも十分に検討されてこなかった。「発育」はルソーが主張した「*éducation négative*」に通じる思想があり、その再検討は今後の課題だといえる。

そして戦後の教育改革が、明治初期の文部省と学校の設立の経過を十分に吟味せず、「教育」が内包する問題を看過したために、様々な問題が今日の社会に露呈しているのだといえる。例えば、「教育を受ける権利」が日本独特の規定であることに連なる（ただ、中国の憲法にも規定されているが、社会主義国だから不思議ではない）。また、高名な教育学者堀尾輝久でさえ「教育勅語の軍国主義教育の反省を踏まえてつくったのが教育基本法です。」（『朝日新聞』二〇〇七（平成19年3月9日）夕刊「ニッポン人脈記」）と誤解を振りまいている。言いたい気持は分かるが「教育基本法」はそのような意図で議論され、制定されていない。

『サンデルの政治哲学』の著者小林正弥が「戦後は主権在民となったにもかかわらず、明治以来の学問的伝統が影響を及ぼしているのである。」と述べているように、明治教育の呪縛は今日にも続いているのである。これらの戦後の問題については『働くための学習』（学文社）に論じているので参照頂ければ幸いである。

今日でも国民は文部（科学）省への疑問がなく、「教育」を盲信している。にもかかわらず、不登校者は平成20年度約13万人（3.2%）、高校中退者は同年約6.6万人（2.0%）、大卒未就職者は平成21年度約11万人（進学者を除く22%）等、国民は守っている「教育」から裏切られている。このような状態は、丁度、ウグイス等の小鳥がホトトギスに「托卵」させられ、そして自分の卵は先に孵化したホトトギスの雛に巣から落下させられるように、国民は「教育」を守らされているが被害を受けているのと同じではなかるうか。つまり国民による「托教育」である。ホトトギスの役割を演じている人達も、その意味に気付いていないことが最大の悲喜劇である。ただ、その役者は一般の庶民でないことは明らかだ。今日の日本は明治という時代が形成した「教育」という言葉の呪縛を受けているのである。このような呪縛から先ず脱却しなければならぬ。「教育」の言葉についてお互いに誤解したままでの議論から生産的な改革案が出るはずはない。「教育」に代わる新たな言葉を探求し、あるべきキョウイクへの改革をそこから始めねばならない。

ここで本書の課題である今後の「人間形成はどのようなべきか」にたどりついた。その回答は既にご理解の通り、「教育」の言葉を使う限り教育改革は困難だということである。ではどうするか。これもご賢察のように、「教育」の言葉を忌避して、新たな言葉で人間形成の再編を試みる他は無いということである。「教育」の言葉を使う限り「国（または為政者）による統制」を排除できず、国民が期待する個々人に適した能力の習得は二の次になるからである。「教育」の複合語も、「教育」を如何に修飾してもこのことは変

教育の誤解を解く

わらない。ポスト近代の人間形成は「教育」の忌避から始めねばならない。「教育」の忌避のみでなく、近代化思想そのものを超える思想を探究しなければならないだろう。

さて本書は、先に著した『教育と学校をめぐる三大誤解』（学文社）の第5章までを新たな知見により加筆・補正し、第6章「工場における学校の成立」と第7章「社会における学校の成立」とを割愛し、第6章として「普通教育」の創造」を追加したものである。ただ、資料を大幅に削除したので詳しくは前著、または各章の参考文献に紹介している拙論（殆どホームページにアップしています）をご参照頂きたい。

本書の論理はこれまでの教育に関する著書にはなかったと思う。その意味で、本書が今日の混迷した教育を考察し、今後のあり方を検討される時の参考になれば幸いである。

このような新たな論理と独自の視座を確立できたことは、長らく職業訓練、職業能力開発の世界で仕事をさせて頂いたことによる。ご支援下さった多くの方々には厚く御礼を申し上げます。特に村瀬勉職業能力開発大学校名誉教授のご援助無くして本書は完成し得なかった。

最後に、これまで公私にわたり様々なご支援をいただいた皆様には厚く御礼を申し上げます。

二〇一一年五月

田中 萬年

■図版出典

- ・ 25 頁 「設立時の文部省」、65 頁：三国町小学校：文部省『目で見る教育のあゆみ』、東京美術、昭和 42 年 1 月。
- ・ 62 頁 「名東県の騒乱報告書」：国立公文書館所蔵。
- ・ 64 頁 福井県三国町小学校：文部省『目で見る教育のあゆみ』
- ・ 68 頁 「往来物」：小泉吉永『江戸の教育に学ぶ』、「知るを楽しむ」、2006 年 10・11 月号、NHK 出版。
- ・ 73 頁 「ベンキョウセヨ」：『尋常小学修身書巻二児童用』、『復刻国定教科書修身』、大空社。
- ・ 74 頁 「小学校卒業だけでは」：『少年世界』第 18 巻 4 号、2012 年、博文館、国立国会図書館蔵。
- ・ 75 頁 大日本中学会芽室支部記念写真：会員ご家族のご提供。
- ・ 99 頁 “勅語奉読。：日本近代史研究会『新版写真図説総合日本史第 11 巻明治時代』、名著編纂会、1988 年。
- ・ 129 頁 「イギリスの技術教育発達史」：佐々木輝雄『技術教育の設立』、多摩出版、昭和 62 年。
- ・ 131 頁 「リバプールのワークハウス」：玉川寛治『『資本論』と産業革命の時代』、新日本出版社、1999 年 11 月。
- ・ 154 頁 “Education in Japan”：同志社大学図書館所蔵。
『文學興國策』：東京都立中央図書館所蔵。